723
133イ
723-133イ
1200501587666
×
複写

エト3N-40

虚子著

昭和十一年より
昭和十五年まで

句日記

中央出版協會版

723
133イ

序

私の生涯の句を纏めたものには、今迄に

年代順　虚子俳句全集（一）明治時代（上）
同　（二）明治時代（下）
同　（三）大正時代
同　（四）昭和時代　昭和五年四月二十一日迄

昭和十五年二月より昭和十六年三月に至る出版　新潮社版

句日記　昭和五年四月二十八日より昭和十年十二月三十一日まで　昭和十一年十一月出版　改造社版

の五冊がある。この中央出版協會版「句日記」はこれに次ぐもので、昭和十一年一月一日より十五年十二月三十一日に至るものである。

是等の句は決して悉く佳句といふ自信があるわけでは無い。中には偶々佳句も交つてゐるであらうといふ程度のものである。然しいづれも私の生活の波の現れであるが故に棄て難い。別に虚子句抄は岩波文庫のうちに刊行する約がある。

昭和十七年一月十二日

ホトトギス發行所にて

高濱虚子

目次

昭和十一年 ―― 一
昭和十二年 ―― 一三一
昭和十三年 ―― 二二一
昭和十四年 ―― 三一五
昭和十五年 ―― 四三三
索引 ―― 附一

昭和十一年より
昭和十五年まで

句日記

虚子

昭和十一年

一月

一月一日。盧子庵新年會。鶴ケ岡八幡初詣。

太鼓橋高く見えをり初詣

隨身の顔の太さや初詣

八幡の八の字は鳩神の春

狆だいて映畫女優の初詣

金色の垂木見上げぬ初詣

一月二日。武藏大澤淨光寺。旭川歡迎會。

梅林の下作したるこまゝと

鴨の中の一つの鴨を見てゐたり

霜どけの道を庚申詣かな

焚火して手かざしをれば花嫁來

花嫁を枯木がくれに見はやしぬ

一月三日。家庭俳句會。深澤、水竹居邸。

屋の棟に沈みては又上る凧

凧の空ぺかゝ凧も現れし

白雲の棚曳く上の凧の空

彼女いづこに在りや焚火の傍に在り

一月四日。百花園偶會。水竹居、あふひ、花蓑、實花。

老木の椿に花を鏤めし

碑の面に立札の影冬日かな

蘆の綿一つとび行く冬日向

凧高し畫の月よりやゝ低し

枯れ果てしものの中なる藤袴

一月五日。武藏野探勝會。目黑不動、大國家。

錦繪に輪飾かけて床の春

霜どけに据ゑし床几に客行かず

杖ついて老の詣でや神の春

寶前にさし込んでゐる冬日かな

暦賣り夢判斷も取揃へ

物賣も佇む人も神の春

霜解を踏み固めたる群集かな

一月七日。七寶會。松韻社。

水鉢の氷に波の形あり

水鉢の氷厚しや梅が下

大いなる冬日に力無かりけり

獅子舞の音裏町に廻り來し

何某の愚痴も目出度し松の内

一月八日。諸俳句會。百花園。

冬ざれの土に施す肥料かな

目口鼻わかずこち見る冬の猫

笹鳴もせずにこそ〳〵こそ〳〵と

日に光る凍解道の美しき

枯荻に添ひ立てば我幽なり

いつまでも此枯荻にそひ立たん

人行かぬ凍解道を我は行く

寒月を網する如き枯枝かな

尿する犬明かに冬の月

歸路卽事。

霧の汽車の火夫石炭の火に浮み

一月九日。草樹會。丸ビル集會室。

こま〳〵の塵持上げし霜柱

あら〳〵しレールのそばの霜柱

喪に籠る床に生けけり寒牡丹

咲かしもし咲きもしたりな寒牡丹

船室の太平洋の初鏡

一月十三日。笹鳴會。丸ビル集會室。

煙突の煙は濃ゆく日脚伸ぶ

日脚伸ぶ今年爲すこと多きかな

一月十七日。家庭俳句會。日比谷公園。

冬木根のごみ箱少しかしぎたり

冬木根の渡りし庭を掃きにけり

一月十八日。谷中本行寺。播磨屋一門、水竹居、たけし、立子、秀好。

澁引きしごと喉強し寒稽古

凍土の日あたりゆるむところかな

一月十九日。發行所例會。丸ビル集會室。

湯氣立てゝ柱時計のくもりたる

湯氣立つる吸入器には布を著せ

一月二十三日。丸之内倶樂部俳句會。

婢家に這入りしあとに寒雀

時計時を刻みつゝあり春を待つ

一月二十四日。鎌倉俳句會。片瀬海岸、岩本樓別館。

寒肥の穴掘りすゝむ芝の松

一月二十五日。吉右衛門招宴。赤坂氷川町、あかね。

水仙の葉影花影重なりて

水仙の花の小搖れやゴムで消す

葉廣きは雪積むこともなくして

ストーヴの上に置きある帆前船

市中の別莊にあり春の雪

ストーヴの音高々と話絶え

一月二十七日。玉藻句會。丸ビル集會室。

籠に入れて切山椒を土產かな

柊を柱にさして顧みし

二月

二月二日。武藏野探勝會。上野毛、田男爵別邸。

來るといふ菊いたゞきといふ鳥も

この高木菊いたゞきも來るとかや

あれを見よ枯枝の僅か動く空

凍道に冬日當つてゐはすれど

殘る雪ふめばなくなる芝の上

日もすがら冬日あたらぬ森の家

雪踏んで一人は行きぬ森深く

同日夜。深澤、水竹居邸。洋行評定。

窓の外人ありのぞく煖爐かな

二月七日。家庭俳句會。丸ビル集會室。

彼所にも雪に佇む人のあり

噴水の氷柱縛れてからみをり

公園の雪も搔かれず美しき

雪の中にほつ〳〵竝ぶつゝじかな

雪の上徑眞直によごれをり

同日夜。大崎會。丸ビル集會室。

麥踏や暖かなれど著ぶくれて

二月十三日。七寶會。愛宕山下、遞信同窓會館。

泡立てる如く美し春の雪

二月十六日。章子を伴ひ渡佛の途に上る。午後三時横濱解纜箱根丸にて。——以下特別の附記なきものは總て箱根丸船中吟——

古綿子著のみ著のまゝ鹿島立

二月十八日。朝、熊野灘航行。

船室の吾子よく眠る寒牡丹

熊野灘少し荒れたり梅を思ふ

この船に伴ひて行く春の月

二月十九日。神戸碇泊。花隈、吟松亭、關西同人句會に列席。

春潮の日々の機嫌や今日はよし

騷立てる春の潮に船乘りす

我心春潮にありいざ行かむ

櫻餅の皿廻り來ぬ廻しけり

席上遠距離電話にて晴子安産のことを知る。

九人目の孫も女や玉椿

二月二十一日。朝、門司著。萍子招宴、三宜樓。

壇ノ浦を過ぎ滿開の梅の寺

老木の梅咲きそめし寺に來し

僧我を咎め顏なり梅の寺

梅を見て明日玄界の船にあり

風師山梅ありといふ登らばや

今日もまた船をのぼりて梅を見る

日本を去るにのぞみて梅十句

太宰府の梅やいかにと門司船出

二月二十二日。正午門司出帆、本土を離る。

今日明日は玄界灘や冴えかへる

玄界の荒波ゆゝし春鷗

玄界の冬波荒く部屋は春

二月二十四日。黄浦江遡江。

黒き斑のある鷗とぶ江の春

上海市内外一見、乍浦路（チャプフール）、月廼家にて晝食小句會。夜、歓迎宴。

犬ふぐりの花に似し花何ならん

上海に來て月廼家の櫻餅

梅水仙王亭の應接間

二月二十六日。

上海の霙るゝ波止場後にせり

霙るゝやよごれ目に立つ旅衣

上海の埠頭霙るゝ苦力かな

霙れるる苦力みな手を袖にせり

長江の濁りまだあり春の海

二月二十七日。

春の海鷗の色のまた違ふ

鷲ほどの鷗が飛ぶや鵜ならんか

大陸の見えて帆船の霞みけり

二・二六事件の報到る。

水仙に日本のニュース聞いてたゝ

二月二十八日。朝、九龍棧橋著。三菱商事下田君の嚮導にて香港ドライヴ。

上陸し相逢ふ客や更衣

パパイヤの一本立てる春の濱

椰子高く聳えし宿の鉢つゝじ

椰子ありて鳥はをらぬ島の春

香港に支那の夏服娘にもとめ

二月二十九日。朝、香港出帆。

香港の春曉の船皆動く

春曉や戎克にわめく人の聲

春潮や窓一杯のローリング

三月

三月一日。南支那海航行。

薫風や楊枝くはへて水夫立つ

ふんまへて南支那海風薫る

人涼し荒るゝ海見て立ちつくす

卓上の桃あわて咲き葉を出しぬ

籐椅子出すボルネオ海を航行す

甲板をよろめき歩りき籐椅子に

月の如く雲間に夏の日ありぬ

三月二日。同。

我船の影夏海にそひ映る

白墨に輪投の線や船涼し

甲板を洗うて涼し輪投する

柴虚風君來り「髪を結ふ一茶」を觀た話をする。
吉右衛門に

髪を結ふ一茶の話船涼し

孤島ありて麥畑ある洋の中

洋上や遙に薄き雲の峰

甲板に日覆の蔭の黑々と

大濤に左舷傾く時涼し

籐椅子は左舷輪投は右舷かな

支那人の三等客の跣足かな

島つひに見えずなりたる雲の峰

乘客涼し南十字を見んと集ふ

星涼しメーンマストは稍かしぐ

三月三日。雛の日なり。夕刻よりスモーキング・ルーム外のヴェランダにて句會。

食卓のメヌーに雛や雛の日

船客に雛の日として櫻餅

雛祭南十字の星の下

衣更て甲板に出ぬ島見ゆる

衣更て海穩かになりにけり

赤道にいよゝ近づく雛祭

赤道の夕燒雲に船は航く

この船に伴ひて來し洋の月

三月四日。新嘉坡著。石田敬二、東森たつを兩君來訪。次で三井物産支店長松本季三志夫妻、三菱商事支店長山口勝、宮地秀雄の諸氏來船。敬二君東道の下に掌子を帶同、一路自動車にて奥田彩坡氏經營の士乃(セナイ)の護謨園を訪ふ。横光利一氏同道。歸途タンジョン・カトンの玉川ガーデン、敬二居等に立寄り、今日の吟行地植物園に下車。それより空葉居に一憩、新喜樂にて晩餐。俳句會。

熱帶に來ぬジョホールも一見す

顏しかめ居る印度人町暑し

馬來人夏木の蔭に一人づつ

ひんがしにリオ群島や潮干潟

アダッブに今歸るなり夕涼し

著飾りて馬來女の跣足かな

走り出ぬ馬來女の跣足かな

裸なる印度ますらを幸きくあれ

晩涼や大海椰子の蔭に立つ

熱帶の日落つる椰子の林かな

晩涼や栗鼠現れて跳ぶ芝生

晩涼や火焔樹並木斯くは行く

三月五日。新嘉坡碇泊。日本人共同墓地に二葉亭四迷の墓を弔ふ。敬二、楠窓同道。章子は途中空葉居に下車。歸途敬二居に立寄り歸船。正午出帆。

朝涼の四迷の墓に詣りけり

稲妻のするスマトラを左舷に見

稲田あり笈あり日本に似たるかな

三月十日。午後三時半、コロンボ入港。自動にて市中一見。

アカシヤの落花を踏んでインデアン

夕燒の雲の中にも佛陀あり

三月十一日。正午コロンボ出帆。これより一週間の間水天の間を航行するのみ。

古倫母に黄金色なる蔦が居た

帆柱にペンキ塗るなり印度洋

今日もまた日は海に入る印度洋

海豚出て踊つて見せつ印度洋

三月十七日。亞典入港。河野夫人、楠窓、章子と共に上陸見物。

亞典とは鬼棲む地かや上陸す

自動車の運轉手こそニグロなれ

椰子もなき亞典の濱や鹽の山

駱駝痩せ瘤も小さくあはれなり

反芻して駱駝下目を使ひをり

オアシスに葵の園を作りなす

一本の椰子もたうとき泉地かな

アラブの子手を出して金くれといふ

錢乞ふもしうねからざるアラブあはれ

夜半甲板に出で星座を觀る。

蝎座が出て寢るとせん星涼み

船人の夜もすがら寢ず星涼し

紅海に入りて星座のやゝ移り

面舵に船傾きて星涼し

三月二十一日。朝六時、楠窓君に導かれ船橋に上り、シナイ山を見る。この邊り亞細亞、亞弗利加兩大陸相迫る。

アラビアにアフリカの山相迫る

アラビアの朝日を負ひてシナイ山

午後三時、蘇士入港。陸路カイロに到りメトロポリタン・ホテル一泊。

カイロ行沙漠に沈む日を見たり

月も無く沙漠暮れ行く心細さ

三月二十五日。地中海航行。

外套を著て船橋に立つことも

三月二十六日。コルシカ、サルヂニアを望む。

コルシカに春の日赤く今沈む

コルシカに春の夕月細かりし

三月二十七日。馬耳塞入港。出迎へし友次郎と一夜を船に過し二十八日朝七時下船。直ちに巴里に赴く。ローヌ河邊觸目。

フランスの女美し木の芽また

四月

四月三日。巴里滯在。

アネモネは萎れ鞄は打重ね

四月五日。巴里に著いてはじめて手紙を認む。

窓の外は春雨すぐに餘所の窓

室暗し春灯いつもともしたる

四月七日。夜、佐藤醇造君招宴、佐藤邸。折柄の月に「春月」五句を課して小句會。

我宿は巴里外れの春の月

四月十日。シャン・ド・マース公園散策。

霞む日や破壞半ばのトロカデロ

四月十二日。朝、エッフエル塔下に集合、柴虚風、佐藤綠水、同悅子、宅孝二の諸君と章子、友次郎同行、ムードン吟行。途中マテーズ氏訪問。

欠伸すぐ唄になりけり花の茶屋

いつまでもトラムプするや花の茶屋

もの靜に花に情話やはゝからず

鉢植の芭蕉青きを含みけり

春霰草に躍りて積りけり

パーク祭春の霰の降ることも

四月十四日。夕ぐれシヤン・ド・マース公園散策。

轉びたる子供に母や木蓮花

四月十七日。夜、日本人會に於ける歡迎晩餐會。食後講演。句會。出席者殆と全部句作。

主婦の頰に子猫の爪の痕のあり

たんぽゝの咲けるほとりの杉大樹

四月十八日。アントワープ行。松岡商店訪問。夜、箱根丸泊り。白耳義觸目。

石炭の山の麓の春の驛

四月十九日。箱根丸にて楠窓君、友次郎と協議の末、米國經由歸朝のことを斷念。午後、松岡君夫妻、楠窓君、町田一等機關士、章子、友次郎等とサンフリート村に花畑見物。

ベルギーは山なき國やチューリップ

ヒヤシンスチューリップ人過ぎて行く

ヒヤシンスラヂオは人に語り居り

給仕女も胸に挿したるチューリップ

世話人も客もかざせしチューリップ

寶石の大塊のごと春の雲

春の雲の大塊の下小村あり

牧牛の廣野の果の春の雲

田舍娘手つないで來る木の芽かな

石楠花の籬の家や町外れ

一旦歸船の上、栗田盧船（船長）、岡崎波哉（事務長）、小島十字（一等運轉士）、楠窓、章子、友次郎と玉木領事邸に赴く。席に玉

木夫人、圓尾領事館員夫妻あり、共に作句。

春灯鏡の中の春灯

四月二十日。ラインに沿うてハイデルベルヒを訪ふ。その夜ケルン、ドーム・ホテル一泊。沿線卽景。

牧草の包みて青し春の山

四月二十一日。ドームの寺院一見、夕景ハイデルベルヒ著。シュロップス・ホテルに入る。

春眠のケルンの寺の鐘が鳴る

ライン河。十句。

春出水中洲の柳ひたりたる

春草をひたして赭き出水かな

雪残る山そこにあり春出水

ライン河へそゝぐ小川も春出水

舟橋を渡れば梨花のコブレンツ

両岸の梨花にラインの渡し舟

古城あり青葉の中に残る雪

古城にナチスの旗や春の風

雪残る山の麓の梨の花

梨花村の直ぐ上にあり雪の山

シユロツス・ホテル、バルコニーよりハイデルベルヒの町を望む。

木々の芽や素十住みけん家はどこ

春山の鴉古城に飛びわたる

春鴉二三羽飛べる古城かな

見えてをる橋五つあり春の川

四月二十二日。同。

囀りの窓の大きなホテルかな

春曉の古城に對しホテルかな

春雨に濡れては乾く古城かな

午後一時五分發、車中雜詠選に沒頭。夜、伯林著。三菱商事藤室益三君夫妻に迎へられ大和旅館に入る。沿道觸目。

望樓ある山の上まで耕され

四月二十四日。藤室夫人東道、日本人の學校參觀、講演。「あけぼの」にて晝食。それよりオリムピック敷地一見。カー・デー・ベー百貨店に立寄り歸宿。大每社員加藤三之雄君來訪。夜、三菱商事支店長渡邊壽郎氏邸にて晩餐會。井上代理大使夫妻、孫田日本學會主事、藤室君夫妻等と小句會。

瓶に挿すリラの花あり夜の宴

折からの夜宴の花やライラック

大扉あけて食卓そこにリラの花

夜話遂に句會となりぬリラの花

四月二十六日。渡邊夫人、藤室夫妻東道、ポツダムに赴く。恰も日曜日。途中觸目。

春風やナチスの旗もやはらかに

花杏ナチスの子等は行列す

花人に敎會の鐘鳴りわたる

サンスーシーの宮殿。

春風や柱像屋根を支へたる

更に櫻の名所ヴエルダーに車を驅る。

箸で食ふ花の辨當來て見よや

春の湖に映るヨットの三角帆

昨夜日本學會に於ける俳句講演會席上にて遽に俳句會開催の事に一決し、夜、其會場日本人會に赴く。會者二十六名、其中にルンプ君あり、ビユルガ姉妹あり、エリカ・フース孃あり。孫田秀春、三田享の兩君斡旋に努む。

ボツダムに春風吹いて人出かな

春寒の汝の衣よごれたり

四月二十七日。藤室君夫妻と再び日本人學校に赴き、日本人會にて晝食。午後一時五十分伊藤君夫妻、藤室君夫妻、迪子さん、バーミンゲ君、ビユルガ姉妹、京極、篠原、高田、寺井、昌谷、世良、仙石の諸君に送られツオ驛發獨・蘭國境に向ふ。

國境の驛の兩替遲日かな

國境を過ぎ和蘭の春の水

和蘭の春の夕燒美しき

この國の溝川までも夕燒けす

終點のフツク・オブ・ホーランド驛構内に繫留の英吉利汽船に搭乘、英國のハーウツチ港に赴く。

和蘭の港に春の月かゝる

春の月かゝりて船路靜なり

三人の旅の親子に春の月

四月二十八日。朝七時前ハーウツチ港著。それより汽車にてリバープール・スツリート・ステーション著。上ノ畑楠窓、八田一朗、松本覺人、槇原覺、河西滿薫、有吉義彌、高橋長春、常盤の主人岩崎盛太郎の諸君の出迎を受く。それより覺人君嚮導の下に楠窓、一朗兩君と倫敦市中一見、デンマーク街の常盤本店にて休息。タフネルパークロードの常盤別館に入る。駒井權之助、朝日新聞社、古垣鐵郎氏等來訪。晩餐を待つ間小句會。

倫敦の春草を踏む我が草履

囀りの鳥あらはれし梢かな

庭の木にブラックバード春の鳥

四月二十九日。楠窓、一朗、友次郎、章子と箱根丸に行く。途中郵船會社に立寄り、倫敦塔を見、タワーブリツヂを渡る。歸路バーク街を過ぎ、トラフアルガー・スクエアのネルソンの像を見、セント・ゼームス公園、バツキンガム宮殿、ハイド・パークを拔け軍縮會議全權の泊りしといふグロブナー・ハウスの前等を通過。夕刻、歡迎小宴。松本、有吉、井上、森川夫妻の諸君列席。宴やがて句會となる。

花林檎村を圍みて山かけて

德利に似たる女房や花林檎

TOKIWAYA に天長節の國旗かな

神赤く染分手綱チューリップ

四月三十日。覺人君東道、沙翁の誕生地ストラツトフォードに向ふ。
楠窓、一朗、友次郎、章子同行。

名を書くや春の野茶屋の記名帳

牛の牧場羊の牧場春の丘

蒲公英の柵にせまりて多きかな

村の門に立つチョンブルの春煙草

踏みて直ぐデージーの花起き上る

シエクスピア菩提寺。

オルガンの鳴り渡りたる春の寺

色硝子透す春日や棺の上

三時頃歸途に就く。

よく肥えし羊の群や牧の春

羊の毛未だ刈らずよ牧の春

賣家を買はんかと思ふ春の旅

リツチモンド公園を拔けて三菱支店長川村晋二郎君邸に入る。槇原、河西夫妻、小柳君等一同の招宴。後苑は梨、林檎の花盛り、宴後句會。

蒲公英にオックスフォード近きかな

五月

五月一日。ロンドン・ペン・クラブの講演原稿整備。一朗、覺人、友次郎、章子等傍にて句作。夜、日本人會にて講演。聽衆の中に南條眞一、池田德眞、駒井權之助の諸君あり。

ストーヴは燃えをり主客庭にあり

ストーヴは燃えをり客を持たせ置き

五月二日。キユー・ガーデン吟行。同行者八田一朗、十時春雄、伊藤東籬、有吉瓦樓、森脇襄治、大林、古垣鐵郎、池田德眞、横原夫人、保柳夫人、小野龍人、保柳才喜、小野靜女、友次郎、章子。夕刻日本人會に戻り食後披講。

蹠(あした)の妻を車に花に曳く

花の下また來る彼も足惡し

蒲公英に下り沈みたる雀かな

轉れるブラックバード人を見る

眞直ぐに歩調そろへて靑き踏む

雀等も人を恐れぬ國の春

立ち寄りて學名を讀む梨の花

引き寄せて放せし桃の枝撥ねる

五月三日。南條眞一君東道市中見物。先づシチー街に車を驅りそれよりフリート・ストリートに入りモーニングポスト、デーリーメール等の前を過ぎ、テームス河畔に出で、サボイホテル、自由黨倶樂部等の前を通り、議會、ウエストミンスター寺院を過ぎ、川を隔てゝ市廳を望み、バツキンガム宮殿を過ぎ一路グリーニツチ天文臺に到る。歸途テームス河を渡りセントポール寺院、大審院等を見、トラフアルガー・スクエアの國立美術館を一見して歸宿。そこへ横光利一君來る。夜、伊藤邸招宴。句會。深更歸宿、同宿の池田德眞君及び令弟朽木子爵と共に昔語り。

ストーヴや暫く立ちし人の椅子

ストーヴの焰のもつれ見てゐたり

ストーヴの焰の上の煙かな

五月六日。朝九時、川村、伊藤、松本、河西夫人、八田、岩崎の諸君に見送られヴイクトリア・ステーション發、正午頃ドーヴアー驛著。英吉利船にて海峽を渡り午後一時半頃佛蘭西のカレー驛より乘車、五時頃巴里著。上野君に迎へられ直ちにマゼスチツク・ホテルに入る。アルフレツド・スムーラ君を帶同して松尾邦之助氏來訪、うち連れて佐藤醇造氏を誘ひアユリアン・ヴオカンス氏訪問。晩餐。席にアルベール・ポンザン氏ありて一同と共に佛蘭西のはいかい談に花を咲かせ記念撮影。ヴオカンス氏邸卽興。

日本の花の提灯ともるもと

五月八日。午前十時、馬耳塞署著。郵船會社に立寄り箱根丸乘船。山下馬耳塞領事來船。四時出帆。友次郎は山下領事等と共に波止場に立ち長く見送る。港内にて清三郎君乘船の筥崎丸と行違ふ。

ハンカチの蝶と細りて尙振れる

五月十四日。スエズ運河通過、紅海に入る。

とぼ〳〵と沙漠を歩く跣足の子

紅海に船早や浮ぶ歸帆疾し

雲の峰常に立ちたる海に來し

雲の峰空を蔽うて立ちにけり

我が船と彼の船に立つ雲の峰

星の座を失ひ星の空涼し

五月十六日。紅海航行。

波もなく雲の峰さへ現れず

五月十七日。同。暑さいよ〳〵劇し。

熱帶の海は日を呑み終りたる

暑しとて甲板歩く夜半の人

寢られねば灯し柱の蟻を見る

この暑さ火夫や狂はん船やとまらん

五月十九日。夜半、ソコトラ島の北を通過。

ソコトラに銀河の星の一つ落つ

五月二十日。

稲妻の描き出したる我船か

五月二十一日。初めてスコールに遇ふ。

スコールや飛魚のとぶ海暗し

スコールの波逞ましして進み來る

血井旭川夫人を悼む。

海草の流るゝ悲し雲の峰

五月二十三日。夜、船長室にて楠窓君主催、洋上吟社發會。

スコールの後の濡れたる欄による

五月二十六日。著したる新聞にて、本田不二麿君の訃を知る。

春かなし先月今日のことなりし

五月三十日。朝、新嘉坡入港。奥田彩坡、古根勳、森野憙由、山口勝、宮地義雄、志村空葉夫妻、玉木北浪の諸君來船。玉川園に行き、日本人會に於ける俳句會に赴き、轉じて森野君の招宴に列し再び日本人會に赴く。深更歸船。

雲の峰湧きいづる善し按摩とる

亘りたるリォ群島は島屏風

帆舟あり淺瀬越しかね雲の峰

沖紺に渚淺黄や雲の峰

晝月に汐みち來らし椰子の濱

鰐の居る夕汐みちぬ椰子の濱

火を焚いてをるも涼しや椰子林

扇風機まはり熱風吹き起る

六月

六月一日。今日より七月號雜詠を見始む。夜、船長室にて洋上吟社第二回句會。

扇風機吹き瓶の花撩亂す

船と船通話して居る灯涼し

タラップに遂に腰かけ風涼し

六月三日。大陸の方に稻妻頻り。

陸の方稲妻さへも懐しき

六月四日。島ほつ〳〵見え始む。四時九龍機橋著。下田君の出迎を受け滿鐵の白石君、楠窓君、章子とスター・フェリーにて香港に到り自動車にて島巡り。千歳花壇に入り揮毫。

江水の濁りはじまる夏の海

六月五日。往航の如く港内の曉の船は皆動きゐる。

短夜や起きて齒みがく船の妻

昨日の素十の電報に「明日與一郎節句」とありければ。

素十抱き冨士子受取る菖蒲の兒

六月八日。朝七時、上海著。堀場定祥、大内穆水、下村非文、星野露頭佛、中田秋平、中原大鳥の諸君來船。上陸、南市の半淞園(ブーソン)に行き それより三菱商事の招宴にて月廼家にて田中三菱商事支店長等と會食。午後五時、閘北の新月花壇のすみれ會に列席。十一時から三菱銀行上海支店の竹内良男君の説明にて、フランス租界八仙橋の黄金大戯場に支那芝居を觀る。

上海の梅雨懐しく上陸す

家中の黴るはなしも可笑けれ

雨漏りを指さす人と瓦廊かな

藝者屋に梅雨の電話のかゝりをり

藝者屋を見上げて梅雨の手水鉢

日本にある思ひなる庭つゝじ

上海やつゝじ倚り咲く太湖石

梅雨の庭雪柳あり之を見る

地蟲啼く一つの聲の靜さよ

六月十日。雜詠選了。對馬見え壹岐見え來る。大阪朝日九州支社より、歸朝最初の一句を送れとの電報あり。

船涼し左右に迎ふる壹岐對馬

間もなく再び、吉井勇氏今宵來社對談し、貴下を思ふの歌ありお知らせ申す『盧子の船赤馬ヶ關に寄らで過ぐ今宵の月夜ほくな讀みそね』との電報。返信に。

短夜を寢ず門司の灯を見て過ぎん

六月十一日。朝六時甲板に立出で楠窓君と共に朝靄深く罩めたる鄉里松山の島山を指さし語る。

戻り來て瀨戸の夏海繪の如し

神戸入港。名古屋の丹治燕人、加藤霞村、加藤了谷。高松の村尾公羽、安藤老蕗。京都の松尾いはほ、平尾春雷、田中八重子、田畑三千女、其他京阪神の諸君五六十名の出迎を受く。蘆屋のとしを居に赴き晩餐。旭川、泊月兩君に續いて猿蓑輪講のため三重史、大馬、涙雨、九茂茅、蘇城の諸君來り小句會。それより輪講に加はり午前一時頃歸船。

短夜の瀨戸内海に明け放れ

短夜を船に歸らんまで話す

夏潮を蹶つて戻りて陸に立つ

加はりし猿蓑夏の輪講に

六月十二日。朝、としを、泊月來船。共に京に王城の病を見舞ふ。京饌寮にて晝食、王城居に到る。俄に王城の主催にて吾等歡迎の意もあり、又病氣快方の心祝の意をも兼ね下河原、美濃幸に招宴句會。八時半の汽車にて神戸に歸り躑躅居に立寄り歸船。

日本に歸りて京の初夏の庭

つくばひの杓横たふや若葉蔭

置燈籠包む茂りも高からず

病よき心祝ひや若楓

六月十五日。正午頃横濱港外に投錨。多數の新聞記者諸君に迎へられ横濱著港の句を强ひらる。間もなく港内に入り午後二時半十號岸壁に繫留。新潟の素十、病茅舍、それに椎花、水竹居、あふひの三長老をはじめ多數の諸君の出迎を受け、社交室にてビールの杯を擧げ下船、鎌倉に歸る。時に午後四時四十分。斯くて百二十日の旅を終る。

美しき茂りの港目のあたり

六月十九日。家庭俳句會。發行所隣室にて。

烏の子可愛がられて弱りをり

蟲焦げし火花美し蟲籌

濁り鮒腹をかへして沈みけり

腹かへし大いなるかな濁り鮒

青柚の肌嬉しやあらぐと

空梅雨の島々を見て船は航く

蠅よけも新しきかな新世帶

蠅よけもかぶせて猫は猫板に

六月二十一日。發行所例會。丸ビル集會室。

夏桑や村人我に不機嫌な

ごろ〳〵としたるいつもの革布團

夏霞・瀬戸の島々態を爲す

古家に蜘蛛を恐れて人住めり

六月二十二日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

朝顔の苗畚を出て地上にも

朝顔の苗なだれ出し畚のふち

夏瘦を見せぬ脂粉の化粧かな

乾きたる黴なりければ爪はぢき

六月二十五日。丸之内倶樂部俳句會。明石河岸、治作。

薫風や錨あげつゝ船動く

夏潮や家より高き船往來

月島の渡しが見ゆる日蔽とる

簀戸に來る汽船の煙明石河岸

治作には船の煙が來て涼し

青簾吹きつけてをる背中かな

夏座敷丸見えにして人涼し

六月二十六日。鎌倉俳句會。要山、香風園。

夏蝶の飛ぶは靜けき樣ならず

一々の夏草見れば あはれなり

六月二十七日。歸朝歡迎會。多摩川、水光亭。

玉川の橋高く見ゆ庭茂り

遊船まで三味さげて行く多摩藝者

屋根船に顏かくれたる妓は涼し

三味線を杖つく涼み藝者かな

七月

七月三日。家庭俳句會。小石川植物園。

梅雨晴のピカと光りし硝子窓

合歡の花日ねもす蝶のすさめつゝ

七月五日。澁谷氷川町、本田邸。薩摩俳會。

立枯の社頭の老樹ほととぎす

夏蝶の横ぎり飛べる社頭かな

七月六日。田中家にて。主婦招宴。

かき餅をたべて見てをり水中花

七月九日。七寶會。芝公園蓮池茶屋。

森のみなうなだれて五月雨

梅雨暗く柱鏡の唯黑し

七月十日。草樹會。丸ビル集會室。

虹を見て手を上げてゐる子供かな

七月十三日。笹鳴會。丸ビル集會室。

迎火を焚く門つゞく舊街道

同日夜。大崎會。丸ビル集會室。

船寄せしところに露の木戸ありぬ

七月十七日。家庭俳句會。百花園。

藤棚の夏蔭抱きて程遠し

七月十八日。風生招宴。麹町永田町、遞信次官々邸。

籐椅子にあれば草木花鳥來

我が前に夏木夏草動き來る

七月十九日。發行所例會。丸ビル集會室。

汽車を待つ人しやがみをる極暑かな

○月青くかゝる極暑の夜の町

行人の流れ極暑の夜の町

緣高し松葉牡丹の庭廣く

夜濯ぎの妻に客來る裏戸より

七月二十一日。築地、きん樂。

蟬の聲お濱離宮にそひ漕げる

木槲の落花の上に水を・打つ

待合の簾の裾に路地西日

七月二十四日。鎌倉俳句會。藤澤在村岡村、天嶽院。

立ち止る牛蒡の葉あり初嵐

七月二十五日。二子多摩川水光亭に花火を見る。

花火見の船に立ちたる藝者かな

七月二十六日。大阪玉藻會投句。

航海やよるひるとなき雲の峰

七月二十七日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

前山の翠微手にあり夏座敷

八月

八月二日。武藏野探勝會。王子、舊澁澤邸。

黑蝶に縞蝶出でゝつともつれ

八月七日。家庭俳句會。愛宕山、茶店。

眉目よしといふにあらねど紺浴衣

同日夕刻より芝公園蓮池茶屋。

葉高低雨後の蓮池にぎやかに

石橋に引づゝて來し蟬の竿

八月十二日。卽事。

古簾垂れて西日や人を待つ

八月十四日。草樹會。丸ビル集會室。

麻の中雨すい〳〵と見ゆるかな

麻高く人かくれ去る門の前

吹きすます笛面白し麻の月

病人の精根つきし殘暑かな

八月十五日。箱根行。元箱根、松阪屋。岩崎巨陶訪問。

第一回

貸切のバスを見送る月見草

夏山の黑きところは杉の森

第二回

綠蔭を出でゝ艇庫や湖の莊

爽やかに進み來れるヨットかな

秋水に映れる赤き鳥居かな

第三回

山裾に花木槿あり庭めきぬ

八月十六日。松阪屋。

第四回

棧橋の人の見えざる濃霧かな

花木槿大きな登山バス著きぬ

蝸牛の下りんとし葉のしなへをり

霧雫ほた〳〵はら〳〵落ちにけり

第五回

船著いて人立ち上る夜の秋

秋の湖や岬の松の下に舟

山の宿殘暑といふも少しの間

女の子水を散らして泳ぎけり

八月十八日。友次郎歸朝迎へのため大阪に行く。
大阪玉藻句會兼題。

新涼やアイスクリームほろにがき

友次郎歸朝を迎ふ。

秋の浪蹶立て歸りし船ぞこれ

八月十九日。甲子園朝日新聞社席に全國中等學校野球試合を見る。

宮樣の今御成とや扇置く

秋曇野球日和といふとかや

同日。大阪玉藻句會。綿業倶樂部。

蜩の聲移り行く裏の山

新涼や佛の顏の美しき

夜、秋琴女招宴。富田屋。

富田屋や蜜豆といへば來りけり

八月二十日。新大阪ホテルに在り。旭川邸元忌出句。

朝露のつゝみて圓か萩の花

俳諧の忌日は多し萩の露

同日。六麓莊。鍋平朝臣招宴。井關末子、立子、友次郎と共に。

石多く小松ばかりや秋の山

神戸驛前相生町、三ツ輪亭南店に牛鍋をつゝき、それより泊月、鍋平朝臣、年尾、立子、友次郎と共に岡山に矢野蓬矢を訪ふ。

はるゝと人訪ふ約や月の秋

八月二十一日。岡山、中山下町の旅宿吉原屋に在り。

武家屋敷めきて宿屋や百日紅

蓬矢東道の下に倉敷の大原美術館を見、藤渡のあとをたづね、鷲尾山に登り、下津井に遊ぶ。

蘭を積んで屋根より高き車かな

荒手茶寮にて午食。旭川舟行、岡山城を見、後樂園に至る。

城を見て後樂園に秋の水

夕風の後樂園に今ありぬ

後樂園能樂堂。

鏡板に秋の出水のあとありぬ

岡山驛。

桃の籠下げて乘る人許りなり

八月二十七日。丸之內倶樂部俳句會。

秋出水せりとて牛を曳いて來し

八月二十八日。鎌倉俳句會。鶴ヶ岡八幡境內蓮池茶屋。

蟬の竿股に挾みて佇めり

八月三十日。家庭俳句會。深澤、水竹居邸。七夕祭。

月よけん芋の葉ずれの音もよし

秋の風衣と膚吹き分つ

九月

九月四日。家庭俳句會。向島百花園。

妹が袖捕へし如く萩の枝

同日夜。舊友會席上卽事。

杯洗の水が映るや半簾

かみなりの好きな妓と端居かな

九月六日。武藏野探勝會。成田山吟行。印旛沼を舟にて渡る。

藻の上の波は退く如くなり

藻の水に手をひたし見る沼の情

ひそやかに藻の花咲きぬ蒲の間

闇の中に見えて來るもの芋畑

九月九日。水竹居招宴。越央子貴族院議員就任祝賀會。きん樂。

此扇捨てんと思ひ名殘あり

扇捨て其後天の高かりき

一夜明けて忽ち秋の扇かな

よく見たる秋の扇のまづしき繪

彼の女秋の扇といふあはれ

庭石に蚊遣置かしめ端居かな

つくばひに廻り燈籠の灯影かな

九月十日。七寶會。西巢鴨、近藤いねゐ邸。

師の像に香一炷の涼しさよ

九月十一日。二百二十日會。丸ビル集會室。

蜻蛉の流るゝ下を老婆行く

おだやかな二百二十日の殘暑かな

烏とぶ二百二十日の空高し

蟲賣の出るは四條の橋たもと

名古屋牡丹會大會兼題、秋雜。

露草を面影にして戀ふるかな

同日夜。草樹會。丸ビル集會室。

命かけて芋蟲憎む女かな

露草の節のところに露太し

九月十二日。子規忌兼題。

蝶々の多く紫菀の花は末

草庵の秋高くして紫菀かな

同日。卽事。

老朽ちて派手浴衣著て坐りをり

老て尙派手浴衣著て色好み

九月十四日。笹鳴會。丸ビル集會室。

秋袷身を引締めて稽古事

萩垣に隣座敷の影法師

九月十六日。京都行。

齒ぎしりや夜長の旅の寢臺車

九月十七日。京都一泊。

目さむれば貴船の芒生けてありぬ

九月十八日。大原行。

萩の花も金森宗和の庭にあれば

障子貼る大原女あり尼の寺

大阪行途上所見。

裸にて墓參りせる男かな

九月二十四日。丸之内倶樂部俳句會。

よき日和今日木犀の香のはじめ

九月二十五日。鎌倉俳句會。たかし庵。

つゞけさまに人の訃を聞く秋の風

干されあり豆は蓆に胡麻は箕に

九月二十六日。家庭俳句會。秋谷平、畠山別邸。

秋山に別墅の門の大きさよ

三五人向き〳〵坐り蟲の宿

九月二十七日。水竹居招宴。永田青嵐主賓。築地きん樂。

必ずしも鯊を釣らんとにはあらず

街燈に照らし出されぬ野分の子

灯の下に野分の水の波立てり

九月二十八日。玉藻句會。丸ビル集會室。

紫蘇の實を摘む鋏にも鈴の鳴る

九月三十日。觀月句會。鎌倉、海濱ホテル。

月の庭松の根方も明るくて

月の暈大いなるかな由井ヶ濱

波音に砂丘の蟲の高音かな

十月

十月一日。偶成。

欄干により て無月の隅田川

十月二日。家庭俳句會。小池、大橋柳男山莊。

門入れば露の草木の迎へつゝ

辷るなと貼紙しあり秋の雨

萩むらに灯火とつて隱れ行く

十月三日。二百二十日會。清水谷公園、皆香園。

我が息を吹きとゞめたる野分かな

飛んで來る物恐ろしき野分かな

吹き飛んで來るや野分の松の枝

松ヶ枝の落ち重なりし野分かな

我に向いて野分のものの飛んで來る

十月四日。武藏野探勝會。神奈川縣都筑郡市ヶ尾中里上谷木六〇二番、海外婦人協會農園。

納屋小藪秋の山かけ買ひしとか

豆飛んで豆彈躍る棒の上

秋山に猫現れて下り來る

十月八日。七寶會。上野動物園。

秋の風驚きやすき麒麟かな

十月九日。草樹會。丸ビル集會室。

宵闇に連立ち出でし女かな

十月十一日。偶成。

寫眞見る昔ふとりしきぬかつぎ

十月十二日。笹鳴會。丸ビル集會室。

芭蕉忌や遠く宗祇に溯る

同日。大崎會。丸ビル集會室。

瓢島立ちし朝寒の旅衣

十月十四日。昨夜京都柊屋泊。年尾、友次郎と共に大阪西寺町法界寺に先祖の墓に詣し、關圭草の招きにより、北新地松糸に至る、秋琴女も來る。松糸正子と十八年ぶりに會す。

十年も十八年も秋一つ

十月十五日。つるばみ會主催、近江國志賀郡眞野村曼陀羅山松茸狩。年尾、友次郎、王城、いはほ等と共に。

茸縄に沿うて松伐り倒しあり

椀ほどの竹生島見え秋日和

蔦の影・すぐそこに落つ菌山

各々は獲物の茸を我前に

茸山の少し曇れば物淋し

歸路、大津紅葉館別館にて晩餐。

鮒一つ突き出て秋の湖廣し

紅に添ひ翡翠映りとび行けり

翡翠の紅一點につゝまりぬ

十月十六日。關西同人會。阪急沿線曾根、星ケ岡茶寮。

帚あり卽ちとつて落葉掃く

富田屋。秋琴女招宴。年尾、友次郎、旭川、いはほ、井關末子等と共に。偶々誓子來る。

篝火の間といふにある夜長かな

十月十八日。名古屋牡丹會大會吟行。日本ライン遊園地に向ふ。

小牧山見えて柿ある百姓家

秋曇もよし百人と吟行す

秋の風岩の彼方の水高し

秋の水低くなりつゝ舟下る

秋の水我を下ろせし船歸る

秋の水木曾川といふ名にし負ふ

十月十九日。遠藤韮城東道。昨夜は飛騨下呂溫泉、湯の島館宿泊。今朝高山に行く。

國分寺

頰高き飛驒の匠の像の秋

角正にて精進料理

秋雨の露次笠かざし客案内

菌など山幸多き臺所

高山は靜な町よ秋の雨

平湯まで九里と聞くなり草紅葉

掛稻に山又山の飛驒路かな

平湯みち見えて紅葉の山のかひ

げてものは白川郷が本場なりとのこと、げてもの展覽會場あり。

げてものは嫌ひで飛驒の秋は好き

十月二十二日。丸之内倶樂部俳句會。

舌の上の葡萄の種や話しつぐ

葡萄食ふ口に煙草の煙殘る

から〳〵と鳴子の音の空に消え

山高く水長うして崩れ築

十月二十三日。家庭俳句會。小石川植物園。

渡り鳥來て賑かや庭の面

岸と水一と平なる落葉かな

我草履朴の落葉を踏み餘す

偶成。

兄のこと話せば泣くや梅嫌

十月二十四日。池上本門寺。三世中村歌右衛門建碑式。

今の世も月明かに百年忌

同日。水無月會。百花園、千歳。

このごろは芒もつとも丈高く

袖ふれて末枯萩の鳴るばかり

穂芒の動くを風といふべきか

十月二十六日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

夜寒妻心とがりて筋青し

夜さむし顎を埋むるばかりなり

なにがしの夜寒を訪ふや壺酒を持ち

庭の柿拐いですぐ食ふたゞうまし

十月二十八日。偶成。

曇りたる後の月なり障子締む

十月二十九日。鎌倉俳句會。瑞泉寺。

鵙高音自然薯を掘る音低く

山寺の庫裏新しき紅葉かな

山寺に秋の終りのよき日和

十一月

十一月一日。往年横川中堂にてはじめて澁谷慈鎧に邂逅。今は京の眞如堂の住職。その還暦祝に句を徵されて。

叡山の秋深かりし思ひ出で

同日。武藏野探勝會。戸塚在上永谷村、貞昌院。

無花果にかゞみて稲を運びけり

赤のまゝの土の高きに登り見る

零餘子蔓流るゝ如くかゝりをり

女房出て田の男よぶむかご垣

痩菊に立てたる杖や稻架の下

見るうちにはづし終りぬ稻架の稻

十一月三日。明治節。日比谷公園。錦樂。玉骨夫妻、蓬矢、鍋平朝臣、水竹居、友次郎と共に。

影引いて子にあとしざり秋日和

うすぐもりせるは煤煙秋日和

秋晴や手たゝく方に子供あり

絹絲を綰ねし如き菊もあり

又こゝに青年團や柿を食ふ

十一月四日。偶成。

北風や船行く方に靡く旗

十一月六日。家庭俳句會。那珂川鮭漁。

下總に來ても雲無し秋日和

藁屋根の造船所あり那珂の秋

自轉車のもたせかけあり鮭の小屋

蘆の中洗場ありて家遠し

蟹が家に咲く赤菊の美しき

船つくるほとりの畑の菊の花

十一月八日。北海道俳句大會に寄す。

大雪のやがて來るべき俳句會

十一月九日。笹鳴會。丸ビル集會室。

たゞの菊あちむきこちむきまろび伏し

同日夜。大崎會。丸ビル集會室。

手をたゝき婢を呼びづめや風邪の妻

十一月十二日。七寶會。王子名主の瀧。

ひそやかに紅葉をめでてこゝに來ぬ

鵙が鳴き靜まりてより頰白なく

紅葉宿開け放ちゐて人居らず

十一月十三日。草樹會。丸ビル集會室。

石に腰してキャラメルや冬紅葉

十一月十四日。二百二十日。百花園。

水にもがき死ぬる虻あり芒散る

青き色殘りて葭の枯るゝかな

黑ずみて芒枯れたるあはれなり

茶の花にくひ入る虻の尻高し

蜻蛉のとまる右肩やゝ高し

空高く渡り鳥あり塵のごと

十一月十五日。發行所例會。丸ビル集會室。

七五三詣り合はして紋同じ

藝者屋を出て來る人數七五三

十夜婆よろめき坐る人の中

佇めば簾のごとく銀杏散る

母と子と拾ふ手許に銀杏散る

十一月十八日。年尾男子出生。

小春日の春を抱いて生れけり

序に一昨年晴子結婚の時。

ほうたんの巖を得たる思かな

十一月二十日。家庭俳句會。丸ビル集會室。

あらましの銀杏落葉は掃きよせし

首巻をして小まめなる歩みやう

彼所にも銀杏落葉の黄金かな

冬日和菊花大會尚つゞく

鯉の背の浮み出でたり菱紅葉

兒童遊園こゝも鈴懸落葉かな

蹶つて行く銀杏落葉の減つて行く

十一月二十一日。木の芽會。鬼子母神境内。吉右衛門邸にて披講。

御神閣をひくや鳩立ち落葉降る

御神閣の凶が出でたる落葉降る

十一月二十六日。丸之内倶樂部俳句會。

高雄女の高き足駄や紅葉散る

いつの間の時雨に濡れし散紅葉

十一月二十七日。鎌倉俳句會。十二社温泉。

客あれば鑛泉沸かす紅葉宿

鏡泉をわかす煙や夕紅葉

十一月三十日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

樹齢約四百年の落葉かな

ころげ行く鈴懸落葉とゞまらず

二三枚落葉浮き立つ鳩下りて

十二月

十二月四日。家庭俳句會。不忍池畔。

藤の根を踏み枯蓮の池を見る

枯蓮の莖折れ〳〵て遠きかな

十二月五日。二百二十日會。上野韻松亭。

やがて來ん塔の影なり疊替

蕎麥が來て梅川亭の疊替

枯木立雲現れて消えにけり

十二月六日。武藏野探勝會。西荻窪、善福寺池。

枯菊に弱りし虻の來りけり

大根を干したる家は木立中

結び文枯木にありし末社かな

富士山とわがともがらと冬日和

十二月七日。偶成。

人に耻ぢ神には耻ぢず初詣

神は唯醫（みそたは）すのみ初詣

推し量る神慮かしこし初詣

初詣して半日を費せり

方丈に炬燵蒲團の濃紫

十二月九日。たけし招宴。丸ビル集會室。精養軒。

山茶花の玻璃戸の内に我はあり

ころげ來し毬枯草をとり越え

垣隣り葺き下ろしたる霜の屋根

影法師の吾があはれや懐手

十二月十日。七寶會。芝公園辨天池。同構内梅月にて披講。寶生千里招宴。

障子さとさめて冬日のかげりけり

公園や踏みくだきたる散紅葉

御靈屋のほとりに乞食焚火せり

荷車に屏風を積みて僧の行く

障子あけて女這入るや增上寺

襟巻をせる僧徒等の物運ぶ

寺寒し別時念佛ありとこそ

大正五六年頃か、鎌倉能樂堂にて「鉢木」を演ぜし時川越守男ワキを勤めくれたり。其後茶掛に句を所望せられたるに書きたる句を打ち忘れ居たるを近藤いぬゐ先頃川越の茶會に招かれ其軸を示されたるを覺え來れりとて敎へくれたるもの。川越は久田家の茶の宗匠なり。

雪の暮茶の時頼に句の常世

十二月十一日。柚木湘水追悼句。嘗て湘水亭に一泊せしことあり。

焚火消え一夜の宿の主なし

同日。草樹會。丸ビル集會室。

病み坐る人や綿袍に顔瞼し

何も彼も火燵の下に探しつゝ

枯芭蕉棒もたしかけありにけり

十二月十四日。笹鳴會。丸ビル集會室。

冬霞せり好日の丸の内

枯草についと引く夕日かな

ねんねこに埋めたる頬に櫛落つる

同日。大崎會。丸ビル集會室。

火の番の障子の影の太くなる

十二月十五日。もの芽會。東品川、洲崎館。

こま〳〵の落葉を踏んで人を訪ふ

面上に冬の日濃ゆきところあり

土階三段枯木三本小社あり

頬被りの上に帽子や海苔をよる

十二月十七日。木の芽會。上野梅川亭。

道々に蜜柑の皮をこぼし行く

冬木影浴びつゝこちへ來る女

ほつ〳〵と青き草あり冬木立

冬木立鐵の鎖にペンキ塗る

冬木立しかと大地に杭を打つ

十二月十八日。家庭俳句會。あふひ居。忘年會。

子供走る枯木の下に一人づゝ

夜の宮の枯木の幹の太さかな

十二月二十日。發行所例會。丸ビル集會室。

橐駝師の雪吊り松を一眺め

頰被りちよと取る眞似をして會釋

飯櫃入澁光りとも煤光りとも

雪吊の松の風情や金閣寺

十二月二十四日。丸之内倶樂部俳句會。竹葉本店。

街燈に添うて枯木の一つづゝ

冬の日を仰げばありぬ銀座裏

十二月二十五日。鎌倉俳句會。南浦園。

獨樂躍り廻りて土に落ちつかず

羽子板を咬へ去る犬別莊へ

十二月二十八日。玉藻忘年會。目黑、大國家。

一つづゝ賣れて行くなり奴凧

世話人は納不動の玄關酒

重ねある六角凧がはやるかや

枯木根に落ちたる錢や猿芝居

十二月三十一日。除夜詣。淺草觀世音。

近づけば心明るし除夜詣

追ひ越せる人美しや除夜詣

大提灯ともらぬもあり除夜詣

除夜詣柱を背に人をよけ

昭和十二年

一月

一月一日。鶴ヶ岡八幡初詣。虚子庵披講。南浦園晩食。

神垣や清淨にして芹の水

巫女舞はメの几帳にかくれつゝ

眞白き神の几帳や初詣

吾子抱きて神近々と初詣

一月二日。武藏野探勝會新潟行。篠田旅館泊。みづほ、素十等の歡迎を受く。

淺き水流れて廣し雪の原

日ねもすの風花淋しからざるや

風花に新潟の町廣くして

風花に神の彌彦は晴れて見ゆ

一月三日。同。石山村吟行。

雪垣にもたしかけある蘆の束

霜圍ひしてある畔の一木かな

一月四日。二百二十日會。きん樂。

春著の妓右の袂に左の手

一月七日。川崎利吉氏息安雄君結婚披露。

七草に更に嫁菜を加へけり

一月八日。家庭俳句會。日比谷公園。

婢に紙鳶を揚げさせておき子は遊ぶ

紙鳶揚げに餘念なき子にほゝゑまれ

噴水の上にかゝれる冬日かな

同日。草樹會。丸ビル集會室。

加留多とる皆美しく負けまじく

雙六に負けておとなしく美しく

一月九日。謠句會。百花園、千歳。

枯園をありて詩生る

羽子の音聞え來にける謠會

一月十日。九日、青々死去追悼句。

笹鳴の大いなる訃を齎せし

一月十一日。鎌倉驛にて電車を待つ間偶成。

太陽を禮讃してぞ日向ぼこ

倫敦の濃霧の話日向ぼこ

伊太利の太陽の唄日向ぼこ

同日。笹鳴會。丸ビル集會室。

春場所も間近になりぬ柳橋

一月十四日。七寶會。西巢鴨、いぬゐ居。

春掛の翁の軸の古びかな

一月十五日。家庭俳句會。小石川植物園。

枯木中人すい〳〵と隱れ行く

梅を去る十歩の邊に佇みぬ

梅語らず畫架をしまひて去らんとす

畫家去りぬ嫣然として梅の花

畫架しまひ立去りぬ梅を顧みず

一月十七日。新年俳句會。丸ビル集會室。

選集の沙汰聞えけり日脚伸ぶ

同日。芝白金今里町、畠山邸諸會。

寒牡丹嫣然として客間かな

一月十八日。澁谷氷川町、あふひ邸。

描きたる屏風を立てしところなり

一月二十一日。京都眞葛ヶ原、京饌寮。俳諧料理。

忽に俳人つどふ時雨かな

しぐるゝと精進料理あたゝかに

一月二十二日。鎌倉俳句會。海濱院。

枯芝に置きしが如く殘る雪

避寒客少なく煙突煙吐くホテル

一月二十三日。青邨送別を兼ね在京同人會。向島弘福寺。

冬枯や櫻の幹の濃紫

雪吊の小さき松や小待合

マスクして我と汝でありしかな

一月二十四日。日比谷公園、きん樂。みづほ、素十、憲二郎と共。水竹居招宴。

男女つと立去る枯木我は行く

煙突の吐き出す煙夕燒けぬ

今すみしベースボールや畫の月

盆持つて踊りし春の妓は小文

一月二十五日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

羽ひらきたるまゝ流る寒鴉

鳴くたびに枝踏みゆるゝ寒鴉

一月二十八日。丸之内倶樂部俳句會。

化粧して氣分すぐれず春の風邪

一月三十一日。深澤、水竹居邸。青邨送別會。

高木より高木に冬日亙り行く

菜畑に霜藏とて蓆切れ

佇める吾妹包みて芝燒くる

そのまゝに君紅梅の下に立て

紅梅に立てば白梅遠きかな

ゆるぐ齒をよゝとざほんに當てにけり

一同に椀取り上げぬ蜆汁

二月

二月五日。家庭俳句會。日比谷公園。

春立つと銀杏大樹を仰ぎけり

二月七日。武藏野探勝會。相州下曾我梅林。加來金升邸。

客ありて梅の軒端の茶の煙

山かけて梅の林や曾我の里

宗我神社曾我村役場梅の中

畑中に老梅ゆゝし曾我の里

二月八日。雀鳴會。丸ビル集會室。

雪山の諸將の如く打竝び

同日。大崎會。丸ビル集會室。

手許暗し日脚延ぶとはいひながら

二月十二日。草樹會。丸ビル集會室。

猫柳ほうけて夕日黄色なり

ほうけたる猫柳あり沼に出づ

二月十八日。七寶會。駿河臺、武田喜男邸。

畑中の老木の梅にたづねよる

二月十九日。家庭俳句會。芝公園蓮池。

手たゝきて婢を呼ぶ聞ゆ梅の茶屋

御靈屋に枝垂梅あり君知るや

二月二十一日。發行所例會。丸ビル集會室。

かりそめの情は仇よ春寒し

二月二十二日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

大石を動かし大地下萌す

頂きの花の高さや大椿

人這入る藪の小寺や二日灸

大椿見えて水車も見えて來る

二月二十五日。「玉藻十句集(第一回)」

今日は又何某が梅もたらせし

梅の枝ぐん〳〵延びし一つかな

同日。丸之内倶樂部俳句會。

大試驗うちほゝゑみて彼はあり

二月二十六日。鎌倉俳句會。たかし庵。

子供等の皆梅折りて遊びをり

上杉の邸跡なり梅の花

松山と藁家との間梅白し

耕せる百姓梅に拘らず

三月

三月五日。家庭俳句會。澁谷櫻ヶ丘、遠藤韮城邸。

雛館雛の無き間ぞ長閑なる

やゝ暗く寛永雛は飾られし

まが罪を背負ひて立てる婢子かな

形代の雛の名殘の婢子かな

齒惡し雛のあられをほつ〳〵と

雛の顏鼻無きがごとつる〳〵と

三月六日。二百二十日會。日比谷公園。

春服や遠くの人のきらびやか

三月七日。武藏野探勝會。武州大澤梅林。

塵塚の掘りてあるなり梅が下

折り〳〵て尙花多き宮椿

三月八日。笹鳴會。丸ビル集會室。

大いなる物芽の出でんけはひかな

土割れて未だ出でざる芽のゆゝし

同日。大崎會。丸ビル集會室。

桑の芽に一羽の鷄を追ひ歸る

一枚の葉の凛として挿木かな

三月十一日。七寶會。市川、吉田桃李莊。

松風の日もすがらなり物芽出る

三月十二日。草樹會。丸ビル集會室。

日もすがら子を罵りて畑打

三月十四日。謠句會。

かあと鳴く時うつむける春鴉

雨晴れておほどかなるや春の空

三月十九日。家庭俳句會。小石川植物園。

こゝそこに石段ありぬ春の山

松かげに人ちらばりぬ春の山

三月二十日。「日本及日本人」碧梧桐追悼號。

碧梧桐とはよく親しみよく爭ひたり

たとふれば獨樂のはぢける如くなり

三月二十一日。發行所例會。丸ビル集會室。

枝垂れたる柳の絲を肩の上に

三月二十二日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

近き山もつとも霞いちじるし

三月二十三日。「玉藻十句集(第二回)」

大寺を護れる濠の春の水

三月二十五日。丸之內倶樂部俳句會。

壺燒を運び來、島の名を敎ゆ

三月二十六日。鎌倉俳句會。二階堂、永福莊。

箒の中に風を受けざる壺菫

畦くえて芹田の水の次の田へ

四月

四月二日。家庭俳句會。葉山、平、畠山別邸。

婢下部走り出迎へ花の莊

妹よ來よこゝの土筆は摘まで置く

ほろ〳〵とこぼるゝ土の花菫

鉛筆で仰向け見たり壺菫

汝そこに我こゝにあり春の山

四月三日。武藏野探勝會。市川、津田績氏邸。

ゐまひゐる人に幸あれ花の下

四月四日。みづほ・いはほ歡迎會。百花園、千歳。

縄張りて物芽の園は大事なり

見るうちにたまりふえたり落椿

落椿受け支へたり池の泥

四月八日。七寶會。大磯、高木別邸。

相對す門裏門や花の坂

別莊を出て別莊へ花の坂

幹太く大いなるかな家櫻

水あれば卽ち落花綴りをり

山裾のおどろの中の櫻かな

知らぬ人落花をふんで庭に在り

四月九日。草樹會。丸ビル集會室。

木蓮の花しまひたる葉の勢ひ

同日。田中家新築披露扇の句。女將に代りて。

花の如く月の如くにもてなさん

四月十二日。笹鳴會。丸ビル集會室。

花人の出てしまひたる驛靜か

同日。大崎會。丸ビル集會室。

畦を塗る鍬の光をかへしつゝ

畦塗るや一首をかしげて懇に

四月十六日。家庭俳句會。發行所。

子の顔に餘花照り榮えて宮まゐり

神前の落花を踏んで皆立てり

四月十八日。發行所例會。丸ビル集會室。

一面の落花に點ず雀かな

さまゞの情のもつれ暮の春

廣前に一面に敷く落花かな

四月二十二日。丸之内倶樂部俳句會。

鍬かたげ筍さげて藪の戸を

四月二十三日。鎌倉俳句會。葉山、水竹居山莊。

折の蓋取れば壓されて柏餅

壓されたる葉の皺たゝむ柏餅

葉の上に青枇杷らしくなりにけり

四月二十四日。二百二十日會。銀座横、春日茶房。

ペンキ屋の脚立の上の夏柳

日覆くらしショウウインドに我映る

龜の子は二十錢なり春の水

同日。「玉藻十句集（第三回）」

行春や荷物を跨に汽車を待ち

四月二十六日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

蝶々は媚び舞ひ蜂は怒り飛び

熊蜂のうなり飛び去る棒のごと

五月

五月二日。武藏野探勝會。調布、新田霞霧園。

風吹いてゆらげる花は金ぽうげ

とぎれたる暮春の畦を跨ぎ行く

畦の木をがんじがらめの蔓若葉

五月六日。二百二十日會。銀座六丁目、實花宅。

新樹濡れて谷川の水濁りたる

馬酔木折つて髪に翳せば昔めき

重の内暖にして柏餅

五月七日。家庭俳句會。深澤、水竹居邸。

若楓ふまへ羽ばたく雀かな

籐椅子を立上りあてもなく歩く

五月十日。笹鳴會。丸ビル集會室。

目立たぬや同じ色なる更衣

同日。大崎會。丸ビル集會室。

幅廣き赤き棒縞セルは派手

五月十三日。七寶會。武藏境、望田邸。

麥の穗の出揃ふ頃のすがくし

花豌豆大學生の下宿せり

五月十四日。草樹會。丸ビル集會室。

古沼に年經て藻刈る翁かな

鯖の旬(しゅん)即ちこれを食ひにけり

五月十六日。發行所例會。丸ビル集會室。

此宿はのぞく日輪さへも黴

ホテル建つ山郭公啼くなべに

えにしだの黄色は雨もさましし得ず

五月二十一日。家庭俳句會。水竹居祝賀。不忍池畔雨月莊。

たゝみ來る浮葉の波のたえまなく

波たちて浮葉のうごくせはしなや

五月二十二日。越央子招宴。きん樂。

金魚玉頭大きく映りをり

稗蒔に近より覗く眼鏡かな

五月二十四日。「玉藻十句集（第四回）」

時じくぞ雨は降りける更衣

衣更へて袂に青しネオンの灯

前山に雨雲ゐるや更衣

同日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

卯の花にかくれ住む人あらまほし

五月二十七日。丸之内倶樂部俳句會。

越す波もありそめにけり蓮浮葉

五月二十八日。鎌倉俳句會。小坪、小坪寺。

潮満ちて濱今狹し夏の蝶

小坪とは小さき夏の漁村かな

沖の方くだくる浪は干潟かな

五月三十日。謠俳句會。百花園、千歳。

蝶の舌曲り入りたる花の蕊

青蘆に生ひ交りけり蓮浮葉

六月

六月四日。家庭俳句會。小石川植物園。

草刈女高下駄はいて脚絆しめ

六月五日。水竹居祝賀會。築地、きん樂。

老い人や夏木見上げてやすらかに

六月六日。武藏野探勝會。我孫子、谷口別邸。

飛ぶ蛙鼻より背に斑が通り

遠く漕ぐ沼渡舟あり五月雨

藻の花や母娘が乘りし沼渡舟

藻の花のゆれて靜まる舟の波

さゝ〳〵と音して漕げる花藻かな

眞菰中杭竝びたる船著場

六月七日。二百二十日會。山王、山の茶屋。

袖の上にぽたりと太き椎の露

五月雨の晴間の蝶は皆白し

槌あげて打つ音霞み拍子拔け

六月九日。銀座探勝會。松坂屋社交室。

旅鞄倒れ夏帽ころげたる

夏柳バス迄送り手を擧げぬ

銀座街頭柳の下の柵に肱

バス停る銀座四丁目夏柳

扇棚女賣子の顏ほのか

六月十日。七寶會。三寶寺池。

河骨の花にからみし藻屑かな

六月十一日。草樹會。丸ビル集會室。

大空に草矢放ちて戀もなし

桑の實や父を從へ村娘

鈴蘭と女車掌とバス走る

彼の女夏手袋の大ボタン

六月十四日。大崎會。丸ビル集會室。

鐵柵に木の下圍のつゞきたる

池に映る紫涼し人なりし

彼の女靴はきへらし薔薇胸に

見るうちに薔薇だわ〳〵と散り積る

六月十七日。白草居自祝招待會。とんぼ。

急がしく煽ぐ團扇の紅は浮く

團扇持つ手をたらしをる誰やらん

六月十八日。家庭俳句會。水竹居招宴。玉川、水光亭。

鮎茶屋の女が釣るや客のそば

六月十九日。白草居退職祝賀會。日比谷松本樓。

唯石あり泰山木の花の下

昂然と泰山木の花に立つ

六月二十日。發行所例會。丸ビル集會室。

玉蟲の光を引きて飛びにけり

はびこつて好きな花なり雪の下

六月二十四日。丸之內倶樂部俳句會。

料理屑流れ行くあり船料理

六月二十五日。鎌倉俳句會。鎌倉山、鎭大師。

この村の半鐘こゝに田植かな

六月二十八日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

人少し動く許りや遠田植

六月二十九日。「玉藻十句集（第五回）」

水道のすこしこほれて黴の宿

靜なる人の起居や黴の宿

七月

七月三日。家庭俳句會。東京驛附近寫生。發行所にて披講。

カーブして夏木の下にバス著きぬ

荷物置き上著脱ぎかけ發車待つ

三等待合晝寐の男起き上り

同日。「山彦」の五周年記念句會。三信ビル。

夏の月うち仰ぎつゝ唯暑し

釣荵釣り空少し我足れり

親竹に若竹添へて三幹竹

七月四日。武藏野探勝會。板橋區大泉、妙福寺。

子供等や青鬼灯を覗き去る

七月八日。七寶會。西巢鴨、近藤いぬゐ居。

拜領の帷子の紋うす〳〵と

拜領の帷子のしみ少しありぬ

七月九日。草樹會。丸ビル集會室。

くろがねの鴉が飛ぶや炎天下

戀すてふ青鬼灯の垣根かな

七月十日。物芽會。淺草觀音、岡田。

足音は流るゝ如し鬼灯市

七月十一日。二百二十日會。鎌倉、瑞泉寺。

ユーカリを仰げば夏の日幽か

山門は茂りの中に落込んで

七月十二日。笹鳴會。丸ビル集會室。

書を讀むや蚊遣煙の細う立つ

七月十四日。銀座探勝會。松屋裏、觀音堂。

引いて來し夜店車をまだ解かず

七月十六日。家庭俳句會。向島、千歳。

夏蝶の赤き斑持ちて飛びかけり

同日夕刻より。大崎會。同所。

子供去りぬ蚊をとる鮒の水に飛ぶ

七月十八日。發行所例會。丸ビル集會室。

這ひよれる子に肌脫ぎの乳房あり

肌ぬいで唐黍畑の夕風に

肌ぬいで紐胸にある子供かな

肌ぬぎし如く衣紋をいなしをり

七月二十二日。丸之內倶樂部俳句會。

へこみたる腹に臍あり水中り

看護婦が縞の日除を今日も下ろす

七月二十三日。鎌倉俳句會。八幡蓮池。

日蔽のはためくすはや大ぼこり

蟬取りの青き網にて吾子と知る

炎天下犬と鳩とはむき〳〵に

颱風を孕み蓮の香の高し

袖につく柳の蟲や蓮を見る

七月二十四日。夜、偶成。

月あれば夜を遊びける世を思ふ

七月二十六日。玉藻俳句會。丸ビル集會室。

颱風の名殘の驟雨あまたゝび

凌霄花のかゝれる門や町眞直

晝花火開きし下の由井ケ濱

むし暑き空に上りし花火かな

町狹し凌霄花かゝる妹が門

夕風に山百合の皆動くこと

七月二十八日。「玉藻十句集(第六回)」

七月三十日。家庭俳句會。植物園。

晝顏に朝顏の色なけれども

同日。五時より木挽町、田中家。水竹居招宴。

とく起きて朝顏にある老夫婦

朝顏の紺一抹のコップかな

八月

八月一日。武藏野探勝會。眞鶴、日本水產會社大敷網。

大敷の網に夏海大うねり

大敷の泛子に夏海高まり來

泳ぎ子の潮たれながら物搜す

釣堀の日蔽の下の潮青し

釣堀に夏の潮の平らなり

夏海や漁師の肩の肉高く

ふるへ居る鰯は網にはさまりて

八月七日。諸句會。高島屋特別室。

物干に鉢朝顏の蔓まとふ

八月八日。五月雨會。水神八百松。

避暑の濱稍さびれたる花火かな

八月十六日。「玉藻十句集（第七回）」

棚瓢かたみに動き初嵐

八月十七日。富士山麓山中湖畔、新田別荘。

目のあたり夏雲起る山の莊

八月十八日。同、ニューグランドホテル。

落葉松に風なき時は稍暑し

八月二十三日、箱根町、箱根ホテル。

夕やけのさめて黝ずむ山の湖

八月二十五日。同。

夏山やよく雲かゝりよく晴るゝ

八月二十七日。家庭俳句會。百花園。

風にとぶ蟬の背を見せ腹を見せ

葛たれて四阿の人青かつし

末枯よ〳〵とて法師蟬